



<論文>抜苦代受(ばっくだいじゅ)と霊言発露(れいげんほつろ) : 宗教法人真如苑における

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋庭, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011295

ばくく だいじゅ れいげん ほつろ
抜苦代受と霊言発露

— 宗教法人真如苑における —

秋庭 裕

小論は、真如苑における「霊言」の確立と構造を理解しようとするものである。「霊言」とは何かについて論じる前に、宗教法人真如苑の概要をスケッチしておこう。

真如苑は、およそ80万人もの信者を擁する大教団であるにもかかわらず、世に知られるところは決して多くない。マスコミで取り上げられることはあっても体系的な紹介であることは少ない。非常に大きな教団でありながらあまり知られることがないのは、真如苑が外部に向けてPR活動を行っていないことや、従来から広範なボランティア活動を展開しているながらも、真如苑の名を表に出すことを極力控えていることにもよるのであろう。

新新宗教に分類されることの多い真如苑であるが、じつはその歴史は長い。1936年（昭和11年）2月を開創として位置づけているから、創価学会や立正佼成会などとはほぼ同時期に発足しているわけである。ただし、それらの代表的な新宗教教団が教線を拡大した戦後期、あるいは高度経済成長期にはさほど信者数の増加はみられなかった。それが高度経済成長の終わるオイルショック（1973年）以降、とくに1980年代に急激に教勢を拡大したのであった。信者数は、1970年代には毎年10パーセントの割合で増加し、さらに80年代に入ると増加率は毎年20パーセントに達した。他の多くの宗教教団が、信者数の停滞が伝えられるなか、なぜ真如苑はこのように多くの人びとを魅了したのであろうか。（なお、90年代をつうじても信者はいっかんして増加している。しかし1990年より教団が信者数の数え方を変えたために、それ以前の信者数および増加率と一律に比較できなくなった^{註1}。）

小論では、限定的にしか議論を展開できないが、真如苑はなぜ現代日本社会を生きる人びとを引きつけてやまないのか考えていこう。小論では、真如苑の魅力の淵源する「霊能」、なかでも「霊言」に焦点を絞り明らかにしていこう。真如教を鳥瞰的に理解するために、「霊言」に着目することがなぜ効率がよいのか。この点もふくめ戦略的にいくつかのキイ・ワードを重点的に解説するところから始めよう。

私たちは「霊能」であるとか「霊能者」とか聞くと、つい週刊誌やテレビのワイドショーなどでとりあげられる、覗き見的な趣向を満足させるそれを連想してしまいがちだ。しかし、真如苑の霊能や霊能者は、そのようなタイプのものとは、あるいは伝統的・民俗的な拝み屋さん型のチャー

マン^{#2}とも、ずいぶん異なった独自性を備えている。

真如苑は、真言密教の流れをくむ仏教教団であるが、他に類例をみない大般涅槃経を所依の根本教典としている。真如教えのなかで大般涅槃経のしめる位置と比重はきわめて重要で大きい、小論では言及できない。しかし、おそらく真如教えに接した人びとが、第一に魅せられるのは「真如霊能」とそれによる「接心^{せっしん}」に由来する特質だろう。「接心（修行）」とは、修行者に位置づけられる教徒が、「ミーディアム」ともよばれる霊能者によって、「真如霊界」から言葉として発せられる霊言を手がかりに、自身の心のなかから仏性を磨きだす修行である。今日の接心は、自らの心のありようを見つめ、一般的で抽象的な言葉で霊言が与えられ、生活上のあるいは信仰上の指針が示される「向上接心」にはじまり、「向上相談接心」「相談接心」「特別相談接心」「鑑定接心」の種類がある。個々のかかえる具体的な問題を解決する色彩が濃くなるのは「相談接心」以降のもので、とくに鑑定接心では霊能者が病筮鈔を駆使して、二者択一を迫られる切迫した問題に選択の指針を与える。

真如苑の「霊能」は、教主伊藤^{しんじょう}真乗の生家に相伝の『甲陽流病筮鈔』に働く「天霊」系の霊能と、「摂受院^{しゅうじゅいん}」（1967年に亡くなった真乗の妻友司^{ともじ}）の祖母が開き、伯母をへて、さらに1936年2月に摂受院が継いだ「地霊」系の霊能が一体になり顕われたとされる。今日、真如苑では、修行を積みば誰でも霊能者になれるとされていて、合計で1,600人以上の「霊能者」を擁しているが^{#3}、これらの霊能者はいずれも天霊系か地霊系の霊能者に二分される。天霊系であるか地霊系であるかによって、霊能者として果たす役割に機能的な差異はないとされる。ただ「霊言」を発するさいに「真如霊界」からのメッセージを、天霊系はどちらかという視覚的なヴィジョンが勝ったものとして、地霊系はどちらかという直感的にインスピレーションが勝ったものとして受け取るという傾向性がみられるという。

天霊地霊の類別はパーソナリティの違いとしては対照的であるととらえられている。天霊は「なんでも理論で知る頭の人」で分析的、理知的な傾向の強い人であり、これにたいし地霊は「足であゆんで納得する実践的な人」であって、直感的で情熱的な傾向の強い人である。教主真乗は、二種の霊能はいわば相補的な関係にあるのだから、互いの尊敬が不可欠であると自分と友司を例にあげて強調している^{#4}。

真如苑の開創の年、1936年（昭和11年）は多事多端であった。立照閣の設置、寒三十日修行、友司の霊能相承から始まり、文明（教主の本名）はエンジニアとして勤務した立川飛行機を退社し、道ひとすじに立ち（専業の宗教家になった）、立川立照講を設立、そして得度と、真如苑の歴史のなかで重要な出来事がつぎつぎと続いた年であった。

しかし、この年が立教の年として銘記されるべき、大きな出来事がもう一つあったことを忘れることができない。それは文明と友司の長男である智文^{ともふみ}の死なのである。智文の死は、真如教え

と真如霊能にとって、きわめて重要な位置をしめるのである。

智文は、1934年（昭和9年）7月29日に生まれた。それが1936年（昭和11年）6月9日に死亡したのであるから、早世というにもあまりに幼い死であった。文明と友司は、宗教家として歩みだすやいなや、長男の死という、じつに大きな不幸に襲われたのである。

智文は、不思議な能力を備えていたという。信者たちは、幼い智文の挙動によって、自らの信心が正しいかどうかさとした。智文は、自己中心的でご利益本位的な信者の前では、いつまでもむずかって友司の膝から下りようとせず、だだをこねたという。最初はこのようすに、聞き分けのない子供だと思っていた信者も、ふと自分の心に非があるのでないかと思って、自らの非を悔いる心をもつと、智文はすぐに友司の膝から下りたという。やがて信者たちは「今日は、坊ちゃんがむずかるから、私の心は間違っているようだ」と気がつくようになったというのである^{#5}。

このように幼い智文は、すでに生前、霊能をもって友司が接心をおこなうのを助けたのである。さらに死後百カ日目に、友司に「感応」し、祖先霊との「道交」を開き、このとき以来友司は「即時入神」が自在に可能になった。つまり必要なときすみやかに入神し、そして入神から安全に戻る（帰神）という一連のプロセスは、智文の生命とひきかえたようにもたらされたのである。智文は、友司の霊能の働きを増幅しいっそう確実なものにしたと理解されている^{#6}。

一見すると皮肉なことに、最愛の我が子の命の犠牲のうえに「真如霊界」の端緒は開かれたのである。幼くとも霊能者であった智文は、たんに寿命が尽きたからではなく、自らの生命をかけて教徒たちの悩みや苦しみを、一身に引き受け他界したととらえられている。智文の死こそ、「ぼくくだいじゅ抜苦代受」に明確な形を与える発端となったと位置づけられているのである。

真如教えは「因縁切り」の教えであると要約されるが、これは、悪因縁に悩むかぎり、どんなにありがたい教えであっても、苦しみのただなかにいる人は聞く耳をもたない。だから、まずその苦しみを取り除いてやること。そうすることで、人は、初めて因縁切りの道を「歩む」ことができるという含意がある。まず苦しみを取り除いてやることこれが「抜苦代受」である。「抜苦代受」は真如教えを理解するうえで、重要なキイ・コンセプトの一つである。

「苦を抜き、代わりに受ける」のは、今や「真如霊界」に常住する智文と、その弟友一ゆういちの兄弟である。友一は、文明と友司の次男で、1937年（昭和12年）に生まれ、1952年（昭和27年）に亡くなった。享年十五歳のやはり短い生涯であった。友一の事績については稿を改めて述べなければならない。

真如霊能を支える「真如霊界」は、一度に完成したのでない。真如霊界の「かくりゅう確立」の過程は、いくつかの画期に分けてとらえられているが、その第一は智文の死であり、そして第二は友一の死なのである。智文の命とひきかえに即時入神（と帰神）が自在なものとなり、抜苦代受が顕われ、真如霊界の確立の基礎がおかれた。これにくわえ、友一の命とひきかえに、抜苦代受のはた

らきがいっそう強まり、安定して霊言がもたらされるようになり、真如霊界は完成を遂げたと考えられている⁸⁷。

幼い二人の兄弟が力を合わせることで、真如苑護法の天部の神々をはじめとする護法善神、さらには仏界との「道交」が可能となる場として、真如霊界は成立したと考えられている。天部の護法善神の「天」とは天界のことであり、つまり六道と仏界の間に位置する天界にある神々が、人と仏の間に橋をかける媒介者^{ミディアム}となるわけである。これらの神々は仏からみれば一段低いところにあるが、人間にはいちばん近いところであって、われわれにもっとも多く直接に威神力を示している。このようにして天部の神々は仏法を護るために働いている。十二神将や四天王、さらに十二天などが天部の神々として知られているが、その数は多く、いずれも金剛界、胎蔵界曼荼羅の外衆として存在している。さらに真如苑における天部の神々には、天霊系霊能の護法善神である「八大弁才天」、そして地霊系霊能の護法善神である「笠法稻荷護法神」^{かさのり}がお祀りされている⁸⁸。

接心修行や相承会座において、智文と友一は、仏界と護法善神と霊能者の間で霊言を媒介する⁸⁹。さらにこの霊言が最終的に教徒に伝えられるのである。このように真如霊界は霊言を円滑に得ることを可能にする場、あるいは機構^{メカニズム}として位置づけることができるだろう。真如霊界において智文と友一は抜苦代受に邁進し、また護法善神を媒介し霊言をもたらす。この世では相まみえることのなかった幼い兄弟が、力をあわせて抜苦代受の礎になり、初めて真如霊界を切り開いたという理解はこのようにとらえられている。今日も接心修行において、霊能者が安全に、安定した霊言を得ることができるのは、二人が切り開いた霊界を清浄に維持しているからであると考えられている。

今日の接心は、ひじょうに静謐なプロセスのうちに終始する。しかし抜苦代受の確立以前、つまり友一の死以前は、安定した霊言は存在しなかった。言い換えれば、名前や単語や断片的な言葉でなく、センテンスとして完結するような霊言はみられなかったのである。したがって、多くは「体現」(身体の動作や形)として霊界からの意が示されたため、霊能者が実際に七転八倒することもしばしばだったという。このようなことから危険防止のため、当時は接心修行の場で霊能者がネクタイと眼鏡を着用することを禁止されていたという。

抜苦代受が確立する以前の修行や初期の接心のようすは『一如の道』に紹介されている⁹⁰。抜苦代受が存在しないということは、真如霊界が確立していないからである。真如霊界は、智文と友一の二人の生命をいわば代償にすることで初めて切り開かれ、完成したのであった。真如霊界を欠いていたから安定した霊言がえられず、「合掌した手ははなれなくなったり、目が開かなくなったり」、「読経中に一人が霊動を出し始めると、みるみるうちに次々と他の人々も霊動をだし」、「全部が飛んだりはねたり倒れてしまったり」というありさまであった。今では「ご霊言によって各自の因縁も、転生すべき心が、その人なりにすぐに悟らせていただけ」るが、「当時は、自

分に現れた現象や靈動を透して、気づいていかねばならぬ」だった。だから「例えば、目が開かなかった」とすると、「心の眼を開かねば駄目なんだと気づかなければ、どうしても上下の瞼がはなれない」という次第であったわけである。

真如靈界に支えられて、初めて真如靈能による接心は可能となる。したがって靈能者は結界された真如苑の精舎以外の場で、単独で靈能を用いて自己完結的に透視したり予言することはできない。靈能者が定められた場所以外で靈能力を用いることができないのは、不可能であるというより、ひじょうに危険であるととらえられている。

ある靈能者によれば、定められた場以外で入神するということを想像するだけで、身の毛が逆立つほど恐ろしいという。これは、生身の人間が、神や仏という聖なる存在のいわば高次のエネルギーを、直接受けとめることはできないし、また仮にできたとしても、とても無事ではすむまいと考えられているからである。したがって、真如靈能の機能する文脈が限定されているのは、人間が靈能力を用いるさいのリスクを取りのぞくためであると考えられるだろう。真如靈界は、聖なる存在の高次のエネルギーを、いわば整流する機構^{メカニズム}として機能しているのであろう。

即時入神（と帰神）がかなわなければ接心修行がまったく成り立たないのと同様、靈言の確立は真如教えにとってきわめて大きな重要性をもっている。靈言の確立が、抜苦代受の確立と、そして真如靈界の完成と重ねて理解されるのはこのためである。それはまた、安定して明瞭な靈言がえられることで、接心修行が完成したことを意味している。つまり、体現や体現とあまり変わらない切れぎれの断片的な単語や名前の羅列でなく、センテンスとして完結する靈言がえられたことが決定的に重要なのである。センテンスとして完結する靈言、つまり今日われわれが知るような文体をもつ靈言は、真導院友一の帰幽を契機に確立したのである。

靈言の文体といっても、真如教徒でない方はまったくご存知ないはずだし、教徒であっても靈言の内容（意味）や解釈ではなく、靈言の「文体」に注意を集中して考察をめぐらせた方は、むしろ教徒であるがゆえに少ないのではないだろうか。私たちのように真如苑の外から苑を研究するという視点をもって靈言に接するとき、靈言がある特色ある文体をそなえていることにまず注意がひかれる。そしてさらに、真導院の帰幽からおよそ半世紀を経て今日にいたるまで、その文体が一貫していることがじつに印象的である。

まずは『一如の道』に収録されている初期の靈言^{#11}からいくつか引用してみよう。教徒でない方には、同時にその内容にも注意を払っていただくことにしよう。

ある日（昭和28年10月9日）接心修行の時、真導院さまは、つぎのような靈話^{#12}をお話し下さった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 〈中略〉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

転生は心の^{たてかえ}立替

自分本位の心から、み仏本位への心の切り替えは、早いほどすべてが楽なのですよ。

一分おくれると一年おくれる

五分引っ込んでいると、五年おくれる

転生して一里 二里 三里

転生せず一里 二里 三里

転生しても、しなくても、歩む道は三里^{#13}。

つぎに引用する霊言も日付が付されているものとしては早い時期のものである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 〈中略〉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

自分を立てるために口をきくのは突く針

親心でいうのは注射の針

眠っている眼を覚すのですよ・・・・・・・・・・。

肉体の眼は開いていても、心の眼が眠って

いたら、真実の相を見ることはできない。

眠りを覚し、見えざるところの真実のみ

ちをよくみつめていくことが大事です。

眼をとざしているから光もさしこまず、歓

喜も湧かず、眠くなってしまうのですよ。

心の眼を開いた時には、光は有難くうけら

れるのですが、心が眠っているからみ教え

の光がさし込んでも、なにも感じないので

すよ。

それどころか、眠るのに却って光が邪魔に

なると、不平を言う・・・そんな怠惰な心を

守っていたら、一生かかっても、真実の仕

合せの道を歩むことはできないのですよ。

(昭和29年2月4日)^{#14}

つぎに引用する霊言も同時期のものである。

—これだけのことをしてきたのに・・・・・・あれだけのことをしてきたのに・・・・・・こうなった、ああなった、ということは、同じ水を飲んでも牛は乳とするが、蛇は毒とする・・・・・・におなじ。

「唯我独尊」も仏頂を踏台にした「独我」なら、毒を撒き散らす（毒蛾）ですよ。

苑にあって・・・・・・助けられた時は有難い、尊いといっている、ひとたび「独我」が通らぬ時は、自らの信不具を省みることなく、その独我（毒蛾）を羽ばたいて毒を撒く、それが不善（闍提）というものですよ。

独我は貪りの毒—人間本位の欲や楽しみを、教えの中で貪るから、堕ちていくのですよ。歓喜の行ないも施餓鬼の行ないも、貪りを除く修行で行じて下さいよ。

言われたから、命令されたから・・・・・・という妄言は、はっきりお断りです。

・・・・・・〈中略〉・・・・・・

（昭和29年6月13日）^{#15}

いくつかのパターンを網羅したいのもうひとつ引いてみよう。これは昭和30年5月2日の日付がある。

真実救いのみ力とは、み仏がおかぐれにならんとした時、お遺し下された大般涅槃（涅槃経）の中にあるのですよ。

涅槃に生き給う仏に一如する喜びは、他にも涅槃に生きる喜びを与え、み仏と他と自らと共に喜び、さらにこの喜びを永遠に、後の世まで続けていくことなのです。

みほとけとは涅槃の体で、常に世にあり、壊れるものでもなければ、失われるものでもなく、食物によって保たれる体でもなく、消え去るものでもないのですよ。

涅槃とは、み仏の智慧、威神力、貪、瞋、痴の妄炎を吹き消す智慧より成れるものなれば、病もなければ^{おそれ}畏怖もない。

いつの世にあっても、水や火に滅びがないように、涅槃には滅びがない。

涅槃に滅びがないから如来（みほとけ）に滅びはないのですよ。この涅槃（さとり）がみ光と

なり力となって初めて衆生を常楽歓喜の世界に転生出離させて下さるのです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 〈中略〉 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

涅槃を示す智を・・・・・・・・・・ 霊能を・・・・・・・・・・ いかほど分解しようとしても分解はできない。
霊能が・・・・・・・・・・ ミーデラムが・・・・・・・・・・ 機械なら分解もできようが、生きているのですから冷たいもの（理論や理屈）では分解できません。

ミーデラムには、生きた霊流を、人々の心の底に注ぎ勇猛の力を与えて下さる生きたみ力が流れているのですよ。

世間的なもの、自分よくなりたいの煩惱身

自分可愛い雑食身

俗世の縛から脱けられない後変身

では、最高の涅槃はわかりませんよ・・・・・・・・・・。 ^{注16}

さて終わりに最近の霊言をあげておこう。真導院友一の帰幽から約五十年を経た1998年秋の『歓喜世界』に収録されているものである。

右の足が重くなってきます

常住のみ仏さまのおみ足には

開祖真如教主さまによって

尊き輪宝が刻まれています

そこに込められているみ心を

よく体得していくのですよ

み教えを語り伝えていくこと

それをみ仏さまは転法輪と言われ

まず実践の足をもって

伝導が行われていくところから

おみ足に輪宝が刻まれているのです

頭の中だけでいかに成る程と

解ったつもりになっても

み教えの尊さは分かりません

理念観念の信心を脱皮して
行って成る程、歩んで成る程の
実践信心に徹していかなければ
真の悟りは得られないのですよ

多くの優れた考えも大事ですが
真心こめた一つの行いの方が
もっとみ親に喜んでいただける
百の理論よりも一つの実践
すばらしい宝を持っていても
行ないで形に表していかなければ
埋もれた財宝と同じですよ

もっと心に思う一つ一つを
実践に移していくのですよ
世のため人のために役立つことを
みんなに喜ばれる大乘の歩みを
思い切ってさせていただこうという
意気込みと覚悟が大切ですよ

実践をして少し困難に出会うと
すぐ駄目だと引っ込んでみたり
思い通りに物事が進まない
怒って途中で投げ出してしまう
そのような弱い信心で
真如のみ教えを貫けるでしょうか

自分は一人で取り組んでいると
錯覚してしまうところに
実践が重荷になっていくのです
あなたが行う精進のすべてを
常住の真如双親さまはいつも

ご覧になられていますよ

信心を澄ませていくのです
感謝の念いで心をいっぱい
常に満たしていくところ
真如双親さま、両童子さまの
温かいはげましのみ声が
心耳に響いてくるはずですよ

我が身どうなろうとも人々の
救済に賭けられた双親さま
その捨きりの行いによって
拓ひらかれた救いの道であるならば
み親と心一つにならせていただき
菩薩の實踐に歓びで努める
そこに濟摂のみ力は注ぐのですよ^{註17}

ずいぶんと紙幅をさいて引用してきたので、これで靈言に接したことがなかった方も、私が靈言の文体とよんだものを理解していただけたのではないだろうか。たしかに初期の靈言と今日の靈言との間には語彙やレトリックなどをはじめ他にも多くの相違点があるだろう。しかし、文体は、およそ半世紀をへだてて、そしてこの間の日本語の変化の激しさを思い合わせれば、靈言には最初期から今日まで相違点よりも共通点のほうが、はるかに勝っているだろう。

では、共通点とは、いったい何なのだろうか。それは、あるゆるぎのない一点から靈言が発せられていることが、どの靈言にもくっきりと刻印されていることである。ゆるぎのない一点、それはおそらく真如靈界ということである。つまり、ここにセンテンスとして靈言を完結させる主体として、真如靈界の確立が証せられているのである。

さて、以下では、いささか唐突な印象を与えるだろうが、近年社会科学の分野でたいへん高い評価を得ている、B・アンダーソンのナショナリズム論^{註18}を参照しながら考えてみたい。アンダーソンは、^{ネーション}国民という「想像の共同体」の成立が、メディアの変容と重なって生じたと論じた。だから、ネーションに固有の独自性^{註19}は、18世紀ヨーロッパにはじめて開花した二つの想像の様式、小説と新聞の基本構造を考察することで明らかになるという。それはなぜなら、ネーションという共同性を成り立たせる枠組みは、小説の文体を成り立たせる枠組みと同一のものであるか

らである、とアンダーソンは論じた。

1887年、「フィリピン・ナショナリズムの父」ホセ・リサールによって著された小説『ノリ・メ・タンヘレ』は、フィリピン近代文学史上最高の作品とされていて、同時にこれは「インディオ」によって書かれた最初の小説であった。アンダーソンは、『ノリ』と、これに先立つ「インディオ」の作品としてはもっとも有名な（小説以前の様式の）文学作品、フランシスコ・バラグタスの『アルバニア王国におけるフロランテとラウラの物語』と比較をしている。『フロランテとラウラ』は1861年初版が刊行されたが、書かれたのは1838年のことらしい。リサールが生まれたとき、バラグタスはまだ生きていた。

『ノリ』と『フロランテとラウラ』は時間的には半世紀しかへだたっていないが、両者はすべて基本的な点でまったく異質である。『ノリ』はフィリピン・ナショナリズムを賞揚する作品でありながら、植民者側の言語であるスペイン語の散文に、タガログ語の語彙を象眼するようになりばめて書かれている。これにたいし、ナショナリズム的な意識の覚醒を欠いている『フロランテとラウラ』は、スペイン語の語彙をタガログ語の四行詩に混ぜあわせている。つまりナショナリズムを志向する作品が植民統治者の言語で書かれ、ナショナリズム的な意識を欠いた作品が、^{ネイティブ}土着の言語でつづられているという一見逆転した関係にこそ、じつはナショナリズムの秘密の一つが隠されているのである^{註20}。

『ノリ』を小説として成立させるのは、そして『フロランテとラウラ』を小説以前の文学作品に帰属させるのは、それこそまさに文体の相違なのである。文体の相違は、二つの作品において、流れる時間と広がる空間がまったく異なることから生じる。『ノリ』の冒頭は、ある特定の時代の特定の日時に、マニラのまったく違う所に住むお互いまったく知らない数百人もの人々が、その夜開かれる晚餐会のことを話しているという情景から始る。ここでは小説の「内的」時間は、（マニラの）読者の日常生活の「外的」時間へと縫い目なしにつながっていて、小説の登場人物、著者と読者など、すべてを抱擁して暦の時間に沿って進んでいく。そしてそこから単一の共同体の堅牢さが暗示的に確証されている、とアンダーソンは論じている。

他方、『フロランテとラウラ』は、すべての基本的な点で『ノリ』とは異質であるが、もっともきわだっているのがバラグタスの時間の扱い方である。話は出来事の途中から突然始り、多様な出来事の間と同時に進行していた相互関係は、一連の「会話によるフラッシュバック」として明かされるのである。つまり、登場人物たちが偶然出会い、おのおの過去を語り合うことで、それぞれの間の関係が示されるのである。この「会話によるフラッシュバック」は、バラグタスにとって唯一可能な話法であった。ここでは登場人物たちは叙事詩の構造によって結ばれているのではなく、彼らが会話する声が彼らを結びつけているのである。バラグタスには、主人公を「社会」に「位置づける」ことも、読者とともに入場人物について語り合うことなども思いもよらな

かった。この話法がどれほど小説の技法と隔たっていることだろうかとアンダーソンは指摘している。

結局、アンダーソンによれば、小説を小説として成り立たせている話法は、「均質で空虚な時間」における同時性の提示の工夫、つまり「この間^{かん}」という言葉の使い方にかかわる話法なのである。単純な例をあげると、男（A）には妻（B）と愛人（C）がいて、愛人には別に情夫（D）がいる。それで以下のタイムスケジュール（表1）のように出来事が進んでいると、AとBが口論していた「この間」、CとDは情事していた、といったように小説は書かれていく。「この間」という語は、異なる出来事の同時性を、それぞれの出来事にかかわる登場人物の直接の出会いを経ることなく提示することを可能とする。『フロランテとラウラ』においてフラッシュバックによらざるをえないのは、「この間」という語を利用することのできる文体が未だ生みだされていなかったからである。

表1

時間	I	II	III
事件	AがBと口論する	AがCに電話する	Dがバーで酔っぱらう
	CとDは情事する	Bは買物をする	AはBと家で食事をする
		Dは玉突きをする	Cは不吉な夢を見る

表1で示した時間連鎖のなかで、AとDは一度も出会わないことも注意すべきだし、CがうまくやっていればAとDは互いの存在さえ知らないかもしれない。では、AとDをじっさいに関係づけているのは何なのか、これが問題である。

まず第一に彼らは「社会」にはめ込まれている。ここで社会はがっちりと安定した現実性をもつ社会学実体であり、したがってその住民（AとD）は、互いに知りあうこともなくどこかですれちがったりしながら、それでいてなお互いに関連しあっていると描写することができる。一人のアメリカ合衆国国民は、二億四千万余の合衆国国民のうち、ほんの一握りの人以外、一生のうちで名前を知ることはおろか、チラッとでも出会うこともないだろう。まして彼には、それらの同胞があるとき何をしているのか、しようとしているのか、そんなことは知るよしもない。しかし、それでいて、彼は同時代の合衆国民のゆるぎない、匿名の活動について知っている——あるいは、確信しているのである。出会ったこともない、さらには出会う可能性もない人々を同胞として結びつけるこの共同性こそ、ネーションとそれ以前の社会関係とを分かち特質である。

第二に、AとDは全知の読者の頭のなかにはめ込まれている。読者だけが、さながら神のごとく、AがCに電話し、Bが買物し、Dが玉突きするのを、すべて同時に眺めることができるのである。また、全知の読者は、AでもBでもCでもDでも、彼らの「心理」にまで通曉している。じっさいの日常生活では他者の内面は、表情やしぐさ、発せられた言葉やその調子などをあれこ

れ解釈して、ようやく到達しうるものである。しかも、あれこれ解釈に苦心惨憺悩んだ末、まったく的外れだったりする場合も少なくない。親しい他者であっても、彼／彼女の内面は秘められた場所であり、謎であることが普通である。

しかし、小説においては、「彼は彼女を一目見たときから魅了されている」ことも、「彼女は彼を死ぬまで恨んでやると決意している」ことも、全知の読者はよく知っている。日常生活では私たちは自分自身の気持ちですらつかみかねている。『何をどうして欲しいのか?』と尋ねられても自分で途方にくれてしまうことも多い。しかし小説のなかでは、「いつでも私は感じている、たったの一日でも、生きていくのは、とても危険なことだと。」と言いきることができるほど、私たちは「賢明」なのである。小説のなかでは、私たち読者は、主人公＝「私」ばかりでなく、あらゆる登場人物の思想・感情・言説の奥深くまで難なく入り込める。小説のなかには、私たち読者の立ち入りが禁止されているような、秘められた場所は存在しない。そこで生じているのは「内的透明性」の世界である^{註21}。

ここまで、一見じつに遠回りをしながら論じてきたが、ようやく元の議論の筋道に復帰できる。つまり、霊言がセンテンスとして完結することの重要性が、これでやっと十分に明らかになるだろう。それは一言で言えば、真如霊界が「内的透明性」に満たされた世界として成立しているということである。だから、読者＝教徒は、霊言に接すると、世界のすべて細部にわたってまで見通すことができるのである。読者＝教徒は、著者＝真如霊界によって与えられた、世界のすべてを同時に眺めることが可能な視点に立つことができるのである。

さらに注意すべきは、全知の語り手である霊界によって語られる霊言は、きわめてスペシャルな性質をそなえている。霊言は、それを読むものが逆に読まれるという、〈ねじれた〉物語なのである^{註22}。読者＝教徒は、霊能者を鏡として霊言に接するとき、傍観者的な読み手であることは許されない。霊言に耳を傾けると、次の瞬間、そこに自分の知らない自分が、自分の知らない因果や因縁のなかで苦しんでいた、いたずらにむなしく的外れな努力を重ねていたりする姿を見だし、しばし愕然とするだろう。読者＝教徒は、霊言のなかに、自分も知らない自分を、主人公として見いだすとき、驚愕と同時に深く魅了されるだろう。そのとき読者＝教徒は、テキストとして霊言を読むことから、自己自身が主人公である物語の内部へ取り込まれてしまう。そして、そのとき、もはや「内的透明性」は、主人公＝私の視点からは消失している。「内的透明性」は、語り手である著者＝霊界にしか開かれていないはずだ。

だから、「朝顔があって、支えの竹があるのだけれど、だらーっとして、竹に巻き付いてい」かなかったり、「クリスマスツリーがあって、すっかりきれいに飾り付けられているのだけれど、電飾のコンセントが差し込み口から抜けてい」たりすることや、「私が、あの、自分をあまり知らなかったこと。自分のご先祖さまの話を、いろんなところから、いろいろなかたちで耳にして、

先祖が通ってきた道と、自分の今の状況が同じであることが、同じ苦しみというか、同じ思いをしている。だから、自分の今の思いというのは、先祖の思いなんだなということを思い知りました。それで、あの、先祖というのは、なんかどこか遠くに離れてあるものではなくて、自分の中にいっしょに生きているような、こう、すごくそういう気がしてきました。」^{#23}といった理解は、真如霊界という全知の語り手の観点を、我ものとしたとき初めて可能となるのである。あるいは、そういう全知の観点をもちうる一点が存在することを知ることが必要ある。

接心において霊能者を鏡として、鏡に映った自分も知らない自分を知ることができるような観点を我がものとするとき、接心にのぞんだ修行者は、読み解くべきは霊言ではなく、自己自身というテキストであったことに気づく。この劇的な認識対象の逆転が成り立つ一点において、読者＝教徒は「内的透明性」を獲得できるのである。ここで獲得した「内的透明性」によって、それまで自分がけっしてもちえなかった視点から、自分や世界を見つめ直すことが可能となるのである。霊能者を鏡とする接心修行のなかで、自分の知らない自分に出会うことで、自分も知らなかった私が主人公である物語を読み解くことが可能となるのである。そういう読解を可能にする地平として、真如霊界は理解されているし、そういう一点から霊言は発せられているのである。

ここまで、霊言の確立と真如霊界の完成ということを考えてきた。私たちは、真如苑を外から研究しているから、霊言や霊界のリアリティーの内部からそれらを論じることができない。したがって教徒の方々からみれば、ずいぶんと見当違いな論じ方をしてきたかもしれない。

しかし、ゆるぎない一点からセンテンスとして完結する霊言が発せられることが、抜苦代受の完成であり、真如霊界の確立であるという評価の吟味として、これまで十分ではなかった議論のある側面に、いささか光を当てることができたのではないだろうか。

霊言の確立と霊界の完成があったからこそ、これにつづく大般涅槃経の「発見」が、じつに大きな意義をもったということができるだろう。しかしこの点は別に論じることとしよう。

注1 秋庭裕「真如霊能と霊位向上」(宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』行路社、1995年)を参照のこと。

注2 宗教社会学の会編『生駒の神々』創元社、1985年。
藤田庄市『拝み屋さん』弘文堂、1990年。

注3 1999年夏時点。

注4 伊藤真乗編著『一如の道』補訂第一版、真如苑教学部、1984年(初版、1957年)、92～93頁。
本書は「教書」として位置づけられている。

注5 『一如の道』406頁。

注6 『一如の道』431頁。

注7 真如霊界の「完成」と「^{かくりょう}確立」と言葉を使い分けている。「確立」については別稿に論じる予定。

- 注8 『一如の道』79～89頁。
- 注9 『一如の道』309～310頁。
- 注10 『一如の道』359～360頁。以下の引用も同じ箇所。
- 注11 『一如の道』の初版は1957年（昭和32年）であるが、私が利用できるのは1984年5月刊の補訂第1版第二刷である。それでも補訂版のなかにも比較的早い時期の霊言が収録されていて、このなかで日付が明記されていて、かつなるべく初期の霊言を引用しておく。
- 注12 この「霊話」は、霊言といってよいと考えられる。今日では霊話という語はほとんど用いられない。
- 注13 『一如の道』288～289頁。
- 注14 『一如の道』243～244頁。
- 注15 『一如の道』245～246頁。
- 注16 『一如の道』4～5頁。
- 注17 『歓喜世界』196号、1998年11月、50～51頁。『歓喜世界』は季刊で信者に頒布される。
- 注18 ベネディクト・アンダーソン 白石さや／白石隆訳『増補 想像の共同体』1997年（原典初版は1983年）NTT出版。以下の議論では、とくに第二章「文化的根源」を参照している。
- 注19 ここでは言及する必要はないのだが簡潔にまとめておく。国民は、まず、心のなかにイメージとして思い描かれるものである。国民の中にはたとえ現実にはどんな差別や不平等があるにせよ、国民は、常に、水平的で深い同志愛に結ばれた集団として、心に思い描かれる。つぎに国民は、主権的なものとして想像される。つまり「民族自決」権をもつべきであるにとらえられる。最後に国民は、領土的に限られた存在として想像される（厚東洋輔・今田高俊『近代性の社会学』1992年 放送大学教育振興会 23～31頁では、アンダーソンの議論の骨子が鳥瞰されている）。
- 注20 興味のある向きは、ぜひアンダーソンの著書や前掲書を参照のこと。
- 注21 厚東洋輔『社会認識と想像力』1991年 ハーベスト社 267～268頁。
- 注22 テキストとしての霊言の位置づけについては、長谷千代子「真如苑の接心修行と信者の世界観変容について」（坂井信生・竹沢尚一郎編『西日本の新宗教運動の比較研究2』1995年 九州大学文学部比較宗教学研究室 7～31頁）を参照のこと。
- 注23 朝顔の話もクリスマスツリーの話もご先祖の話も、教徒にたいするインタビューによる。